

学習課題： 元寇はなぜ起こったか？

モンゴル帝国の拡大

13世紀初頭にモンゴルの遊牧民を統一したチンギス・ハンしそを始祖とするモンゴル帝国は、次々に勢力を拡大し、第5代クビライ・ハンの頃には、ヨーロッパ東部から朝鮮半島までの広い地域を支配下に置きました。

モンゴル帝国は、強大な武力を背景に周辺の国々に服従を求めました。モンゴルの求め

に応じなかった国々は、武力によって侵略・破壊されました。反対に、モンゴルの求めに応じた国の王たちは、モンゴルに対して貢物みつぎものをしたり、戦争に協力したりする代わりに、自分たちの国を引き続き治めることができました。

モンゴル軍は騎馬戦を得意とする反面、水上での戦いなどは苦手でした。そのため、支配した国の兵士たちを雇い入れやと、自分たちの戦争のために戦わせたのです。

モンゴル帝国（元）と日本

クビライの頃になると、身内同士の権力争いからモンゴル帝国はいくつかの国に分かれ、ゆるやかに結び付くようになります。この国々のうち、現在の中国を中心とした地域にあったのがクビライの治める元げんでした。

朝鮮半島の高麗コリョを支配したクビライは、日本にも服従するように高麗王朝を通じてたびたび呼びかけました。再三の呼びかけに対し日本側から返事がなかったため、クビライは遂に日本出兵を決めます。

1274年、モンゴル人・漢人・高麗人を中心とした約3万人の軍が対馬・壱岐を襲撃つしま いき しゅうげきしました。これを

文永ぶんえい えきの役と言います。文永の役で大きなダメージを受けた日本に対して、クビライは翌年ふたたび使者を送り、降伏を求めました。しかし、日本側はこの使者をすべて処刑してしまいます。

1276年それまで中国の南の地域を治めていた南宋ほろを滅ぼしたクビライは、いよいよ日本に向けて本格的な侵攻しんこうを決めました。これが1281年の弘安こうあんの役です。高麗人を中心とした約4万人の軍と旧南宋人を中心とした10万人の軍からなる大軍が日本を攻めました。

一説によると、これほどたくさんの南宋なんそうの兵士が投入されたのは、戦いが終わって仕事がなくなった南宋の兵士たちが悪さをしないように、日本を支配した後、彼らを日本に移り住ませようと考えていたからだと言われています。

図：「モンゴル帝国の領域」

学習課題： 元寇はなぜ起こったか？

モンゴル帝国への服従と高麗のモンゴル化

日本の鎌倉時代に朝鮮半島を治めていた王朝を高麗と言います。朝鮮半島付近まで勢力を伸ばしてきたモンゴルは、高麗に服従を求め、その領土に侵入しました。高麗は軍人を中心におよそ 30 年にわたって抵抗しましたが、ついに高麗王朝の国王はモンゴルに服従することを決め、自分の息子をモンゴル（元）の皇帝クビライ・ハンへの人質として差し出しました。モンゴルの宮廷で育ったこの息子は、後の 1272 年にクビライの娘と結婚し、高麗の王（1274 年即位）として戻ってきます。

忠烈王ちゅうれつおうというこの新しい王は、元に毎年莫大ぼくだいな貢物みつぎものや奴隷を送って忠誠を示しました。このことは高麗の住民に大きな負担となったので、忠烈王は何度か

図：「高麗人の髪型と弁髪」

王の位を降ろされてしまいます。しかし、その度に彼は元げんの力によって王の座に返り咲きました。

忠烈王ちゅうれつおう以降、高麗コリョの王たちはみな元王室げんの娘と結婚し、元王室げんの一員となることで一目置かれる存在となりました。また、忠烈王ちゅうれつおうはモンゴル人と同じ弁髪べんぱつを高麗の住民にも強制する命令を出すなど、文化的もモンゴルに融合しようとしてしました。

朝鮮の歴史書によると、元寇はこの忠烈王ちゅうれつおうが、元げんと高麗こうらいのつながりをより強固にするために、クビライに提案したものだと言われています。日本侵攻のための船や食糧等を準備するために、高麗の住民は自分たちの食べるものもない状態の中、大変苦しみました。

三別抄さんべつしょうの乱

国王がモンゴルに服従することを決めた頃、このことを不満とした軍人のグループが反乱を起こしました。三別抄さんべつしょうと呼ばれるエリート軍を中心にしたこの反乱軍は、高麗王朝コリョから独立した政権を打ち立て、朝鮮半島の南へ逃げのびながら抵抗を続けました。1270 年から 4 年に渡ったこの抵抗を、三別抄の乱と言います。

1271 年には三別抄政権は鎌倉幕府に国書を送り、モンゴル軍がこのままでは日本にも侵攻することを教え、共に闘うことを求めました。しかし、その前後に高麗王朝から何度も反対の内容の国書を受け取っていた幕府は混乱し、返事をしませんでした。

三別抄の乱は 1274 年に平定され、同年日本にも元軍が侵攻してきますが、三別抄の抵抗が長引いたことで、鎌倉幕府は元との戦争の準備を整えることができたとも言われます。

学習課題： 元寇はなぜ起こったか？

朝鮮半島からの国書

ほうじょうときむね しっけん
北条時宗が第 8 代執権となった 1268 年頃、朝鮮
半島の コリョ 高麗王朝を通じて、げん 元の皇帝フビライ・ハンか
ら元への服従を求める国書が日本の朝廷に届きました。
日本を代表して外国と交渉する窓口は、これまで
日本の王家である朝廷でした。しかし、この元からの
国書に対する返事を、朝廷は幕府に まか 任せました。幕府

図：「元から日本の朝廷への国書」

は元の要求に従わないことを決め、国書に返事をしませんでした。その後も何度か元からの国書がありました。朝廷は当時の国際社会のルールに基づいて、元に断りの返事を出すことを提案しましたが、幕府は徹底して国書自体を無視しました。

また 1271 年には、朝鮮半島で げん 元に抵抗していた さんべつしやう 三別抄政権から援助を要請する国書がありました。元への服従を求める高麗王朝からの国書と内容が むじゆん 矛盾するため不審に思った幕府は、これにも返事を出しませんでした。

国難に備えて—幕府権力の拡大—

それまで鎌倉幕府が命令できたのは、主に幕府と「御恩と奉公」の関係で結ばれていた御家人だけでした。しかし、しんこう モンゴルの侵攻という こくなん 国難に備えて、幕府と朝廷が一体となって国全体が共に闘う体制が整えられました。この体制の下、これまで幕府の支配の及ばなかった朝廷が直接治める地域からも、兵士や食糧が供給されました。外国の侵略という今まで経験したことのない事態に直面したことで、鎌倉幕府は自分たちの権力を日本中に行きわたるより大きなものにしたのです。

図：「博多箱崎宮〈敵国降伏〉の札」

また、しっけんほうじょうときむね 執権北条時宗は、日本各地の寺社に てきこくこうふく 「敵国降伏」の

ための きとう 祈祷を命じました。この時代には、元と日本の戦争は

元と日本の神様の戦いであると捉えられており、日本の神様の力を増すための きとう 祈祷が戦争に勝つために大変重要だと考えられていました。実際、弘安の役で嵐によって元軍が撤退すると、この嵐は神風だとされ、祈祷を行った寺社の手がらになりました。

鎌倉幕府は 2 度の元寇をなんとか退けましたが、借金を背負ってまで戦った御家人たちだけでなく、こういった朝廷の兵や寺社にまで恩賞を出さなくてはいけなくなりました。